
 学 会 記 事

第 69 回新潟癌治療研究会

日 時 平成 21 年 7 月 25 日 (土)
午後 12 時 25 分～

会 場 ホテル日航新潟 4F
朱鷺

口障害や頬の審美的な配慮が必要で、後方型では明視野における根治性切除が有用と考えられた。

2 舌扁平上皮癌の頸部転移様相と予後因子の検討

新垣 晋・金丸 祥平・船山 昭典
新美 奏恵・小田 陽平・芳澤 享子
菅井登志子・齊藤 力・星名 秀行*
永田 昌毅*・藤田 一*
高木 律男*・林 孝文**

新潟大学大学院医歯学総合研究科
口腔生命科学専攻顎顔面再建学講座組織再建口腔外科学分野
同 口腔生命科学専攻口腔健康科学講座顎顔面口腔外科学分野*
同 口腔生命科学専攻顎顔面再建学講座顎顔面放射線学分野**

I. 一 般 演 題

1 頬粘膜扁平上皮癌一次症例の臨床的検討

篠原 治征・田中 彰・小根山隆浩
佐藤 英明*・山口 晃・又賀 泉*
日本歯科大学新潟病院口腔外科
日本歯科大学新潟生命歯学部口腔外科学講座*

頬粘膜は口唇内側から臼後部までの広い範囲である。この前後に広い解剖学的部位に発生した頬粘膜癌の治療方針と治療後の評価を画一的に行うことは困難である。そこで今回、頬粘膜扁平上皮癌一次症例に対する治療方法と予後について、原発腫瘍の解剖学的部位を考慮に入れて臨床的検討を行った。

【対象】1996年4月から2006年3月までの10年間に本学新潟病院口腔外科にて根治的治療を行った頬粘膜扁平上皮癌患者24例を対象とした。

【結果】24例の内訳は、T1が7例、T2が9例、T3が3例、T4が5例であり、これらを前方型、中央型、頬肉溝型、後方型に分類して治療と予後の検討を行った結果、前、中央、頬肉溝型では口角の再建を配慮した治療が行われ、後方型に対してはswing approachで術野を展開し、顎骨を含めて切除し皮弁で再建した。全例の5年粗生存率は63%であった。

【結論】頬粘膜癌に対する治療は、前方型では開

舌扁平上皮癌の頸部転移様相と転移に関連する予後因子について検討した。

対象は組織学的頸部転移を認めた舌扁平上皮癌94症例で、転移数、転移率(転移リンパ節数/摘出リンパ節数:LNR)、転移レベル、被膜外(節外)浸潤の有無、術後放射線、化学療法の有無、郭清時期別(一次、二次)の生存率を算出した。全症例の5年疾患特異的生存率は62%であった。5年疾患特異的生存率は、摘出リンパ節数(33個以下63%、33個以上60%)、転移リンパ節数(2個以下62%、3個以上61%)、LNR(0.09以下65%、0.09以上60%)、転移レベル(I、II 64%、III、IV 52%)、被膜外浸潤(有51%、無70%)、術後照射(有59%、無66%)、術後化学療法(有77%、無52%)、郭清時期(一次53%、二次61%)であり、これらのなかで有意差を認めた因子は術後化学療法の有無のみであった。